【圧倒的な勝利者となる】

「ロマ書講解・第33回」

『ローマ人への手紙』

8章35～37節

熊　谷　徹

2014年6月8日（第2主日）

【序】「私たち」（8章37節）とはこの私達のことなのか；

今日の箇所は『ローマ人への手紙』の中でも、そして、新約聖書全体の中でも、ひときわ有名な箇所である。**8章37節**でパウロはこう言う；「**しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです**」。素晴らしい言葉である。だが、この「私たち」とは誰なのか。ここに「この私」も含まれるのか。これについて神学者カール・バルトは名著『ロマ書講解』の中でこう問うている；「「我々」とは誰か？もしかして、この我々のことか。すなわち、こうこうと信じ、回心し、行為し、確信し、霊感を受け、教導された我々のことか？」と。自分自身に向かってこういう問いかけをしながら読む、それが聖書を読むということなのである。私達は今のバルトの問いに対して何と答えたら良いのか。答えはこうである；「然り。私達も圧倒的な勝利者となるのである。神の憐れみの故に、キリストの愛の故に、この弱い私すらも『圧倒的な勝利者となる』ことができるのである」。

【1】キリストの愛から引き離すもの（8章 35 節）。

さて、パウロは『ローマ人への手紙』**8章35節**でこう問いかける；「**私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。**」（35a）。

「**キリストの愛**」とは、「私達」に対するキリストの愛である。それは、十字架という自己犠牲によって私達を神の子どもとして下さる愛である。今ここにある私達に迫り私達を内から捕らえて離すことのない愛である。その愛は聖霊を通して私達の心に注がれている（5:5）。一体誰が、キリストの愛から私達を離れさせることができようか。答えは勿論「何もなし」である。何者も我々をキリストの愛から引き離すことはできないのである。

パウロは、ここに、キリストの愛とキリスト者との間を引き裂こうとするものを7つ列挙する；「**患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。**」（35b）。

「**患難**」は外から襲ってくる苦難、試練である。「**苦しみ**」は私達を苦しめる

様々な「困難」であり、悩み、苦しみ、嘆き(2コリント6:4)である。「**迫害**」はすでに始まっていた。「**飢え**」と「**裸**」は迫害ゆえに味わう、食べ物がなく、着る物もない厳しい生活状況である。「**危険**」と「**剣**」は迫害がもたらす殉教の危機とそれ故に起こる死への恐怖である。これらは思いつきでここに並べたものではない。これらはパウロ自身が体験してきた事、そして今もなお現に体験しつつある事実なのである。パウロは『コリント人への手紙第二』11章でこう語っている;「23 **牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。**24 **ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、**25 **むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。**26 **幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、**27 **労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渇き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。**」(2Cor11:23-27)。

パウロは「**キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじて**」いた(2Cor12:10)。しかし、どんなにつらい事であっても、キリストの愛を断ち切る力はない…これがパウロの信仰から生まれた確信であり、体験から得られた信念であった。

【2】屠られる羊のように(36節);

(1)次にパウロは**詩篇 44篇22節**(LXX訳)を引用する。**36節**である;「**「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。**」。

この詩篇は、イスラエルが主のために大きな苦難と迫害に会うであろうことを歌っている。神に忠実に生きようとする神の民が、世間から迫害されたり苦難に会うことは避けることができない。キリストも「**あなたがたは世にあっては患難があります**」(Jn16:33)」とおっしゃっている。

(2)今、この詩篇を少し詳しく見てみたい。まず冒頭に、「**あなたのために**」とある。神のために、主のために、キリストのために、である。迫害、殉教は神の為に生きようとする者が、神の為・キリストのために受ける苦しみであり、死である。その苦しみと死を通して、神の栄光が現わされキリストの御名があがめられる。そういう「神とキリストのために」受ける苦難と死である。パウロは、「私達」が受ける苦難と死は、決して無意味なものではない、それは、「主よ、あなたのために」受ける苦難と死であり、それによって主の栄光が現されるのだ、と言うのである。

次に、「**一日中**」とある。朝から晩まで、いつも常に、である。パウロがこの手紙を書いていた頃は、ローマの信徒達にはまだ、本格的な迫害は及んでいなかったが、パウロは自分が激しい迫害に会ってきたその経験から、間もなく教会全体が迫害の嵐に襲われることを直感していた。そしてその予感は的中した。パウロ自身が、あの悪名高いローマ皇帝ネロの迫害によって殉教することになる。そしてそれ以後、初代教会のクリスチャン達は、「一日中」殉教の死と隣り合わせに生きていくことになった。

そして、「**私達は、死に定められている**」とある。ユダヤ教のラビたちは、この詩篇を、主の証人たちの死、殉教の死を意味すると理解し、迫害されて殉教することは神に愛されている証拠なのだと考えた。元ラビのパウロも、これを殉教詩篇とみなしてここに引用したのである。そして、忍び寄る迫害の嵐に怯えてはならない;神の民が迫害に会い殉教することは詩篇がすでに預言していたことなのだ;迫害に会うのはむしろ神に愛されている証拠なのだ、と言って迫害に怯える信徒たちを励ますのである。

最後に、「**私たちは、ほふられる羊とみなされた**」とある。「ほふられる羊」とは食用に殺される羊のことである。食べるために「ほふられる羊」は「死に定められている」。「死にさらされている」(新共同訳)無力な羊は死を逃れることはできない。迫害の嵐に晒されていた初代教会のクリスチャン達は無力な「ほふられる羊」であった。彼らを迫害した者達は、クリスチャンを「ほふられる羊」のように扱い、迫害した。そして拷問を加え、生きたまま野獣の餌にしたり、はりつけや火あぶりの刑にして、虐殺したのである。

【3】圧倒的な勝利者となる（37節）；

（1）「**しかし**」とパウロは**37節**で言う：「**しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。**」

「**これらすべてのこと**」とパウロは言う。内外様々の苦難、試練、迫害、殉教の死など「これらすべてのこと」である。パウロは、「**これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです**」と言う。単に、負けない・屈しないというだけではない、勝利するのである。それも単に勝利するのではない、「圧倒的に勝利する」のである。野球の試合で言えば、2対1でかろうじて勝利するというのではない、10 対 0 の大差で勝利するというのである。新改訳が「**圧倒的な勝利者となる**」と訳した言葉（hypernikomen）は「越えて（hyper）」という言葉と「勝利する（niko）」という言葉の合成された言葉で聖書ではここにしか登場しない。新共同訳は「**輝かしい勝利を収める**」と訳し、文語訳と口語訳は「**勝ち得て余りあり**」と訳している。聖書学者のモファットは「**私たちは勝利者以上である**」と訳し、ブルースは「**超勝利者である**」と訳している。これらの訳が示すように、単純に勝利するということではなく、「圧倒的な勝利を得る」「圧倒的な勝利者となる」というのがこの言葉の持つ意味である。この言葉でパウロは、あらゆる患難・苦難をも乗り越えて行く勝利、神に選ばれた者たちの輝かしい勝利、圧倒的な勝利を強調するのである。

（2）だが、そのような圧倒的な勝利はどうしたら得られるのか？どうしたら勝利者になれるのか？・・・自分の力では勝利を得られないという事は、他ならぬ自分が一番良く知っている。勝利は自分の力によって得られるのではなく、「**私たちを愛してくださった方によって**」与えられるのである、とパウロは告げる。

「**私たちを愛してくださった方**」とはキリストのことである。キリストは私達を愛して下さり、私達を罪と滅びから救うために十字架に死んで下さった。キリストは私達を愛してご自身を捨てたのである。パウロは『ガラテヤ人への手紙』の中でキリストのことを、「**私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子**」

(Gal2:20)と言っている。キリストは「私達を愛して下さった」。そして「私達のためにご自身をお捨てになった」。愛より強く尊いものはない。神の愛、キリストの愛よりも強く尊い愛はない。私達はその神の愛、キリストの愛に包まれている。神に愛され、キリストに愛されている。その愛とは、十字架にご自身を犠牲にされた愛である。それ程までに私達を愛して下さった方が、私達の主である。このお方の故に、このお方にあって、「**これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者になるのだ**」・・・これがパウロの確信である。そして、彼のこの確信は、彼自身の体験に裏打ちされている。彼の体験とは何か？それはまさに35節に述べたような体験、「**患難、苦しみ、迫害、飢え、裸、危険、剣**」などを味わったという体験である。そして、先程読んだ第2コリント書(11:23－29)に記されている、苦難と迫害の体験、「**むち打たれ、死に直面し、荒野の難、海上の難に会い、食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました**」というような体験である。パウロは、これらの幾多の苦難と迫害を、自分の力によってではなく、キリストの愛の力によって乗り越えてきた。その彼が、『コリント人への手紙第二』4章でこう言っている;「8 **私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。**9 **迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。**10 **いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。**11 **私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。**』(2Cor4:8-11)。

【4】あるキリスト者の証;

(1)ところで、再来週の6月23日は「沖縄慰霊の日」である。昭和20年のこの日、沖縄での戦争が事実上終わった。「沖縄慰霊の日」はそのことを忘れないために沖縄が独自に制定した日である。預言者イザヤは、戦争のない世界の到来を夢見てこう預言した;「**彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。**」(イザヤ 2:4)。

(2)戦争はいつの時代でも悲惨であり残酷である。これから述べるのは、太平洋戦争のさなか、天皇制軍国主義の支配した時代の話である。当時は、クリスチャンがクリスチャンとして生きるというだけでも困難な時代だった。1943年(昭和18年)、21才の大学生・渡部良三氏は学徒動員によって、新兵として中国へ渡った。翌年の春、上官は渡部ら49名の新兵を前にしてこう言った;「今日、八路軍の捕虜を殺させてやる。藁人形とは違うから教官殿の訓示をよく聞き、おたおたしないで突き殺せ!」。上官の命令通りに虐殺が進行した。上官の命令は天皇の命令とみなされ、絶対服従であった。その命令を、こともあろうに敵の目の前で拒否すれば、銃殺刑であった。だから誰一人上官の命令に逆らえなかった。捕虜を杭に縛り、その捕虜を新兵が順番に銃剣で突くのである。

1人殺し、2人殺し、そして5人目の捕虜の時、とうとう渡部の順番がまわってきた。渡部はどうしたか…。彼は祈り始めた。ただひと言、「神様、力をお与え下さい、道をお示し下さい」と。そのとき、彼は神の声を聞いた。「キリストを着よ。虐殺を拒め。命を賭けよ」と言う声を…。教官が彼に銃剣を渡した。だが彼は突こうとしなかった。数官はドスの効いた声で言った、「おい、渡部、信仰の故に殺さないのか」。渡部はあらん限りの力を込めて言った、「はい、そうであります!」。

それは彼の命がけの信仰の告白であった。信仰の勝利の叫びであった。良心が悪に打ち勝った瞬間であった。さすがに教官も彼を銃殺することはできなかった…。だが、戦いはそこから始まった。それ以後、彼は同僚から激しい嫌がらせを受けることとなった。ビンタ、足蹴り、水責め、ゲートルや靴での殴打など、戦友である筈の兵士たちからリンチを受けたのである。そういう過酷な軍隊生活の中で彼は短歌を作ることに慰めを見出した。その一つにこういう歌がある;「殉教をおごるにあらず　ひた直く　師の賜いし道　踏みしのみ」。この歌にある「師」とは救い主イエス・キリストのことであり、「師の賜いし道」とは十字架の道である。

さて、いつしか、その地方の中国人の間に、「捕虜の銃殺を拒んだ日本人がいる」という噂が知れ渡った。罪の暗闇の中に一条の光がさした。一人のキリスト者が罪の暗黒を打ち破ったのである。ヨハネはキリストについて、「**光は闇の中**

に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった」(Jn1:5)と言ったが、まさにその言葉を彷彿とさせる話である(『証言』より)。

(3)長々と渡部氏の証を紹介したのは、今朝の箇所に記されているような「**患難、苦しみ、迫害、飢え、裸、危険、剣**」(35)が、彼の身にも襲って来たからである。そして彼が、「**これらすべてのことの中にあっても圧倒的な勝利者となった**」(37)からである。

【結】キリストの愛が私達を取り囲んでいる;

新聖歌に『キリストの愛、我に迫れり』という歌がある。新聖歌227番に収められている。作詞したのは山口昇牧師。家内が共立女子聖書学院で学んでいた時の院長で、私も神学校時代にギリシャ語と新約聖書学を教わった。その彼が故・天田繋師の作曲で作ったのがこの歌である。山口師はこの歌でこう主の愛を歌った;「キリストの愛、我に迫れば、わが命、君にささげて、ひたすらに、主のために生く」。この歌のように、キリストの愛が私達に迫っている。私達は「キリストの愛」に取り囲まれているのである。あなたはキリストに愛され神に愛されているのである。愛なる神はこう仰っている:「**わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。**」…イザヤ書43章4節。

私達は神の愛、永遠の愛に包まれているのである。何者もこの大きな愛から私達を引き離すことはできないのである。

私達は神に愛され、キリストに愛されている。キリストは私達を救うために十字架にご自身を犠牲にして下さった。それ程までに私達を愛して下さったのである。それ程までに大きな愛、深い愛で私達を愛して下さったお方が、私達の主キリストなのである。このお方に繋がっている限り、私達は、「**圧倒的な勝利者になる**」ことができるのである。御言葉はこう告げている;「**私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。**」…『ローマ人への手紙』8章37節◇